

展示室1「“Z”と呼ばれる時代」パネル 1/3

“Z”と呼ばれる時代

最近よく耳にする「Z世代」という言葉。一般的に、1990年代半ばから2010年代半ば頃に生まれた世代のことを指しています。本展は、1990年代から今に至るまでの「Z世代が生きる現代」について、当館の所蔵作品を通して考える試みです。

展示室の冒頭には、1990～2024年の間に日本や世界で起こった主な社会的事件をまとめた年表を掲示しています。どのような時代であったと言えるのか、一緒に振り返ってみましょう。

第1章では、1990年代以降の社会情勢や事件を反映した作品を紹介します。この時代の大きな特徴として、①デジタル化の進行、②戦争や自然災害の頻発、③不安定な政治や経済に着目します。スマートフォンを題材とした作品や、戦争や虐殺に関連した作品、現代社会への不安感を表現した作品などを展示します。複数の作品を比較しながら、私たちが生きている時代と向き合ってみてください。

また、Z世代の傾向の一つとして、SNSを通して自分自身を積極的に発信したり、仕事より自分の趣味を優先したりするなど、自分らしさを重視することが挙げられます。このような「個」を重んじる考えは社会全体にも広まっています。現代は「多様性の時代」とも言われるように、一人一人が自分らしく生きることが尊重される時代だと言えるでしょう。

そこで第2章では、現代社会のキーワードと言える「自分らしさ」とは何かについて、作品から考えていきます。

美術を通して、今の時代を改めて振り返ることは、これからも生きていくためのヒントや活力につながるのではないのでしょうか。本展が、激動の現代社会を生きる自分自身を改めて見つめ直す機会となれば幸いです。

展示室1「“Z”と呼ばれる時代」パネル 2/3

第1章 少し前に起きたこと

本章では、1990年代以降の社会を反映した作品を中心に紹介します。

林勇氣<light/shadow>は、スマートフォンを操作する手の動きを基にした映像作品です。デジタル化が進んだ現代社会のコミュニケーションの有り様を巧みに表現しています。

第二次世界大戦の終結から50年経った1995年に、太田三郎は中国残留日本人孤児の肖像を切手シートにプリントしたシリーズを制作しました。一方で、アンゼルス・キーファーの〈世界智の道：ヘルマン会戦〉には、ドイツの知識人やナチスの軍人などが描かれています。戦争に翻弄された人々を表現した作品を通して、現在も世界各地で起こり続けている戦争を自分事として考えてみてください。

また、1994年にアフリカで起きた集団殺戮を主題としたアルフレッド・ジャー〈シックス・セカンズ〉や、波乱に満ちたポーランドに生まれ育ったマグダレーナ・アバカノヴィッチの〈12体の立像（群衆シリーズ）〉には、不条理で困難な世界を懸命に生きる人間の姿が表現されています。虐殺や自然災害など罪なき人の命が危機にさらされる事件の絶えない世の中を、生きぬいていく強さが感じられる作品です。

ファン・リジュンとジャン・シャオガンは、独裁政治と急速な経済成長が進む中国社会を生き、その不穏さや未来への不安を絵画として表現しています。

このような「少し前に起きたこと」に関連する作品が、現在も続く社会的な課題に目を向けるきっかけとなることを願うばかりです。

展示室1「“Z”と呼ばれる時代」パネル 3/3

第2章 自分らしさとは

本章では、Z世代だけではなく現代社会のキーワードと言える「自分らしさ」について、美術を通して考えていきます。作家の自画像や自刻像に加え、様々な視点からアイデンティティについて考えさせられる作品を取り上げます。

時代はさかのぼりますが、パブロ・ガルガーリョ〈キキ・ド・モンパルナスのマスク〉は、20世紀初めのパリで多数の芸術家のモデルを務めたアリス・プランの顔の特徴を抽出して構成し、伝説のモデル「モンパルナスのキキ」を表現した彫刻です。社会的な地位や役割という彼女の外側のみが表され、内側の空洞はまるで本当の彼女自身が存在しないことをほのめかしているかのようです。

津田亜紀子は、型取りを反復し、繰り返される模様で人体を表現することで、大量生産された商品にあふれる社会の中で、人間存在におけるオリジナル性を探ろうとしました。

四宮金一、絹谷幸二、今村源は、自分の姿を作品に表現しました。絵画や自分自身の虚構性や、社会と対峙しながら画家として生きるという強い意志、個を超えた生命の繋がりなど、一口に自画像・自刻像と言っても多様な表現を読み取ることができます。

他にも、本能的で自身の気持ちに対して真っ直ぐな子どもの姿に人間の本質を求めた奈良美智や、子どもの頃に誰もが持っていたであろう想像力にあふれた世界を表現した唐仁原希の作品を展示します。

これらの作品を通して、「自分らしさ」とは何かじっくりと考えてみてください。

展示室1「現代版画」パネル 1/5

銅版画の技法

銅版画とは、金属の版をとがった道具などでひっかいたり薬品で溶かしたりして、へこませる（凹部をつくる）ことによって絵柄をつくり、そこにインクを詰めて、紙などに写しとる方法で制作される版画のことです。

凹部をつくるための方法はいくつかあります。

とがった道具を使って版を直接傷つける方法に、エングレーヴィングやドライポイントがあります。また、はじめに版の全面に傷をつけて、刷れば真っ黒な面になる版をつくり、そこから白く残したい部分を平らに直すメゾチントと呼ぶ技法があります。

そして薬品で版を溶かすことを腐蝕といい、それを利用した技法がいくつかあります。例えば、はじめに腐蝕を防ぐ薬品を版の全面に塗って、線描したい部分をとがった道具で削り、露出した部分だけ凹部になるようにして版を作るエッチング。また、腐蝕液に浸ける時間が長いほど刷ったときの色が濃くなることを利用して、腐蝕を止めたい部分に防蝕剤を塗りながら腐蝕を繰り返すことで、さまざまな階調の画面を生み出すアクアチントという技法もあります。これらが、銅版画の代表的な技法であるといえるでしょう。

今回は、それらの技法を用いて独自の表現を生み出した作家たちの作品を、線の表現・面の表現という視点から見つめます。豊穡な銅版画の世界の一端をご覧ください。

展示室1「現代版画」パネル 2/5

銅版画 線の表現 1

版画に表れた線のなかに、作家による表情の違いが見てとれる作品を紹介します。線的な表現に適した銅版画の技法にはエングレーヴィングやドライポイント、エッチングなどがあります。それらの技法を用いて縦横に表現された線は、作家によってそれぞれ違う表情をもち、ひいては、作家ごとに異なる「線」に対する考え方も表れていると言えるでしょう。

ジャコメッティは、現実にあるものを自身の見えるとおりに表現することを追求した、細長い造形の彫刻作品を多く生み出しました。それらの彫刻にも通ずるデッサンのような版画作品をご覧ください。

また、20 世紀最大の画家のひとりパブロ・ピカソは、生涯に膨大な数の版画を遺したことも知られます。今回は、彼が新古典主義に回帰した時期の作品をご紹介します。ここでは「三人の女」という優美なモチーフが、それぞれ違う陰影を伴って表現されています。

李禹煥（リ・ウー＝ファン）は、80 年代から、版に刻みつけた縦横な線による版画を発表し始めます。李は、線を刻むことで周りに生まれる「余白」の部分が、作品の主題であるといいます。そして作品タイトルにも、作品の外の空間へと想像が広がるような言葉を選ぶようになります。今回はそんな作品群のうち、〈廃墟へ〉シリーズを紹介します。

展示室1「現代版画」パネル 3/5

銅版画 線の表現 2

線の表現に適したエンブレイヴィングやドライポイント、エッチングなどがあります。今回はそれらによって制作された、気の遠くなるほど細やかな線、あるいは高い技術を示す自在な線による作品を見てみましょう。

20 世紀最大の画家の一人であると同時に、膨大な数の版画を制作したことでも知られるパブロ・ピカソの作品群の中からは、熟達した技量から生まれる曲線と直線が混ざり合った作品〈人物〉をご紹介します。

長谷川潔は、銅版画の技法が普及していなかった戦前の日本を離れ、フランスで版画のさまざまな技法を学び、89 歳で死去するまでかの地で活躍し続けた人物です。今回は画業の前半に取り組んだ、細かな線の重なりによる作品群を展示します。

浜田知明は、戦争体験や神経衰弱的な心の動きなど、自身の心象風景をかたちにした銅版画を制作し続けました。〈わたくしのヨーロッパでの印象記〉シリーズでは、渡欧したさいに目にした古都の街並みや宮殿・博物館の内部などが、西洋の伝統的な銅版画の雰囲気をもまえて表現されています。

そのほか、無数の線の重なりによって現実とは違う独自の世界を構築しようとした木原康行の作品もをご紹介します。ぜひ、線による表現の奥深さを発見してください。

展示室1「現代版画」パネル 4/5

銅版画 面の表現 1

面的な表現に適した銅版画の二つの技法であるアクアチントとメゾチントによる作品を、比較しながら見てみましょう。

まずはアクアチントによる作品から。駒井哲郎が丸山薫の詩集「蟻のいる顔」の挿絵として制作した本作は、白黒の微妙な階調をもつ画面のなかにさまざまなかたちのモチーフが浮遊し、まるで画面の外にまで詩情豊かな世界が続いているかのようです。そのほか、「画家とモデル」を主題としたパブロ・ピカソの作品などをご覧ください。

次にメゾチントによる作品を見えます。長谷川潔は、時代ともに廃れていったメゾチントの技法を用いて芸術作品を制作し、その技法を復権へと導いたことで知られます。今回紹介する作品は小さなモチーフが組み合わさったもので、秘密めいた独自の世界が表現されています。また、斎藤カオルの作品では、女性と彼女らの装身具、花などのモチーフによって物語性のある画面が作り上げられています。白と黒とその間にある微妙な階調による豊かな世界をお楽しみください。

展示室1「現代版画」パネル 5/5

銅版画 面の表現 2

銅版画において、作家たちにとっての前提だった制作方法や「版」をつくるという概念を疑い、伝統的な制作のしかたのその先へと踏み込もうとした人々の作品を、面的表現という視点から紹介します。

中林忠良は、戦後日本の銅版画を語る上で欠かせない人物です。70年代後半からの彼の作品には、自身が身近なところで拾った木切れや草などのモチーフが、原寸大のイメージとなって登場します。彼は、時間とともに朽ちていく現実の草花と、銅版画の「腐蝕」の作用を重ね合わせました。そして作家自身もコントロールできない時間の流れという概念を、版画によって表現しようとしたのです。

一原有徳は、版画制作の無限の可能性を探り続けた作家です。今回はその中から、金属板の上に腐食剤などを置いて腐蝕させ、無数の水玉や編み目などの模様を作り出した作品をご紹介します。彼はこの方法によって、作家の作為でなく、物そのものがもつ物性を版に残そうとしたと言えるでしょう。

その他、加納光於による、現実世界における無限の色彩の広がりをも銅版画で幻想的に表現しようとした作品、清塚紀子の、平面である版画と立体物を組み合わせた作品などを紹介します。これらを見れば、あなたの「銅版画」のイメージが変化するかもしれません。

展示室2「徳島ゆかりの美術」パネル 1/1

徳島ゆかりの美術

変わっていくものと変わらないものを作品の中に探してみましょう。たとえば、服装や室内装飾などの風俗は時代とともに変化しますが、自然の風景など、いつも私たちのそばに寄り添ってくれているものもあります。

石川真五郎は、戦前は東京で活躍していましたが、戦後には故郷の徳島に戻り、この地の風景を清新な画風で表現し続けた画家です。また、森山知己は画材や制作方法の面において日本美術の名作を研究し、それを現代に生きる自身の作品に反映させ続けています。今回は岡山県に生まれて現在も同地で活躍する彼による「外部」の目から見た徳島の風景をご紹介します。

作品を見ると、変わっていくものが多い中で、意外にも今も残る・変わらないものがそこかしこにあることに気づきます。翻って私たちの日常も、変わらない大切なものを探するという視点で見つめていただければと思います。